

新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究

和泉庫四郎*

昭和60年5月31日受付

Inazo Nitobe's Overseas Studies at the Johns Hopkins University and the Development of his Agrarian Policy

Kurashiro IZUMI

Inazo Nitobe (1862-1933) was a well-known figure as one of the pioneers of agricultural economics of this country. He is even now popular among Japanese social scientists as the author of famous "*Premises of Agronomics* (Japanese title: *Nogyo-honron*)" which played an important role for the development of Japan's agrarian policy during the pre-war era.

Nitobe made his advanced studies for six and a half years in the United States of America and Germany. He spent much the same period of time in each of the two countries, but it seems he got much stronger influence on his academic mind from American institution. In the United States he made his graduate studies from 1884 to 1887 mainly at the Johns Hopkins University (JHU), Baltimore, Maryland. Although JHU at that time was a quite new university which had been just opened in 1876, it was already a well-known institution among American universities for promoting higher studies in history and the social science under the leadership of Herbert B. Adams.

In spite of his three years graduate studies at JHU, Nitobe did not receive any academic degree from this institution when he left Baltimore for Germany in the mid-summer of 1887. The major aim of this paper, therefore, was to make clear the following respects as to Nitobe's studies at JHU: 1) what courses or lectures did he attend? 2) what papers and how many times did he read in the Seminary of history and political science under the guidance of Herbert B. Adams? and 3) did he have any economic difficulties during his stay at this university in comparison with other Japanese graduate students?

Then in order to define the above respects, plenty of research information and materials were directly obtained from JHU under the close cooperation of its Milton S. Eisenhower Library and Ferdinand Hamburger Jr. Archives. These include copies of the JHU Circulars of the 1880s, the Records of JHU Seminary of History and Political Science, Vol. 1 (1877-1891), and letters of I. Nitobe to Herbert B. Adams. Many new interesting findings in relation to Nitobe's studies of agrarian policy during his stay at JHU, are introduced in this paper.

* 鳥取大学農学部農業経営学科農業経営学研究室
Department of Farm Economics, Faculty of Agriculture, Tottori University

問題の所在

新渡戸稲造(1862-1933)の米・独留学、とくにジョンズ・ホプキンス大学で過したアメリカ留学が、彼の生涯に決定的といつていいほどの大きな影響を与えたことについては、改めて指摘するまでもないところである。しかし、新渡戸(当時は太田)がアメリカ留学時代に、「何を、どのような形で学習したか」については新渡戸研究家の間で伝説的に伝えられているだけで、現在においても十分に解明されていない点が多い。この小論の目的はこうした〈新渡戸稲造研究〉の現状を考慮し、新しく入手した資料によってそれらの不十分さを補いながら、アメリカ留学が新渡戸の生涯に果たした意義を評価するための、基礎資料に役立たせるということである。

新渡戸がサンパブロ号に乗船、横浜からアメリカ留学のため出港したのは1884年9月1日であった(英文週刊紙『ザ・ジャパン・ウィークリー・メール』1884年9月6日号、250頁参照)。サンフランシスコに到着してからジョンズ・ホプキンス大学に入学するまでの過程は、彼の「留学談」(『札幌農学校校友会雑誌』第19~22号収録)や『帰雁の声』(全集第6巻収録)によって明らかである。すなわち、彼は、サンフランシスコに上陸すると、札幌農学校在学時代に彼の洗礼に立会ったメソジスト派の宣教師メリマン・C・ハリス夫妻の出身校、アレゲニー・カレッジ(所在地ペンシルヴァニア州ミードヴィル)に入学した。

しかしこの大学での滞在はわずか2週間足らず、同郷(盛岡)の先輩、佐藤昌介の勧めで、同じ年の10月中旬、佐藤が1年前から在学していたジョンズ・ホプキンス大学(所在地メリーランド州ボルティモア)の大学院に入学した。

新渡戸はこの大学に在学中に札幌農学校助教授に任命され、1887年5月、大学院修了を目前にしてドイツに渡航する。したがって、新渡戸は大学院課程を修了しないままアメリカ留学を中断したことになるが、この間のJHUでの彼の学習を、世の〈新渡戸研究〉は、ほとんど例外なしに、次のように説明している。すなわち、「この大学で学ぶこと3年、研究した学科は経済学、農業経済、行政、国際法、歴史学、英文学、ドイツ語等であった」と。

ところで、こうした説明は、アメリカにおける農業経済学の発展史に若干の知識をもつ研究者に対して、少なからぬ戸惑いを感じさせる。アメリカにおける農業経済学の研究は、新渡戸がJHUに留学していた時期よりも

10数年後の1890年代の後半から着手され、大学で講義されたのはそれよりもさらに数年後の、二十世紀になってからのことだからである。

また、新渡戸がJHUで経済学、行政、国際法などとともに「農政学、農業経済を学んだ」とする説は、新渡戸自身がこの大学での学習に触れ、「農政或いは農業経済を調べる積りであったが……英米では、30年前は政府が直接農業に関係する事はなかった。従って農政に当る文字さえもなかった。故に指導教師の切なる勧告によって日米関係史なるものを調べた」(「学生時代のウィルソン」中央公論1917年3月号収録)といっていたこととも矛盾する。それでは何が発端となって新渡戸稲造がJHU留学時代に農政(学)と農業経済(学)を学んだという説が、研究家の間の通説となったのであろうか。

以上の点を明らかにすることから、アメリカ留学時代の新渡戸の実像を追究してみることにする。

資料

(a) 国内資料

アメリカ留学時代の新渡戸稲造の学習を追跡していくとき、国内で利用可能なものとして次の資料を挙げることができるであろう。すなわち、

- 『札幌農学校史料』収録の「広井勇・太田稲造助教採用及びドイツ留学の儀上請」(1887年1月)、「同伴に付き内閣総理大臣への上請」(1887年1月23日付)
- 札幌農学校同期生、とくに宮部金吾稿「新渡戸稲造小伝」
- JHU留学時代の新渡戸の宮部宛の書簡(とくに1885年11月13日付の書簡)

まず『札幌農学校資料(2)』収録の「広井勇・太田稲造……ドイツ留学の儀上請」には、新渡戸(当時は太田)のドイツ留学に関連して彼のJHUでの学習が、次のように説明されている。

……太田稲造儀ハ……(明治)17年8月自費米国へ渡航、爾来マレイランド州ボルチモール府ジョンズ・ホプキンス大学ニ於テ専ラ農業経済、地方制度、農業統計等ノ諸項研究致居候……学力才能拔群……

また、宮部金吾「新渡戸稲造小伝」(前田多門、高木八尺編『新渡戸博士追憶集』1936年刊収録)は新渡戸のJHU在学時代の学習を次のように説明している。

この大学で研究された学科は経済学、農政、農業経済学、行政、国際法、英文学等でありました(前掲書、Ⅶ頁)

上記の宮部金吾の説明は、それ故、〈新渡戸論〉の多

くの著者が試みている前掲の説明とほぼ同じである、というよりはむしろ、宮部の説明がそれらの人びとに、そのまま引き継がれているということができよう。

こうした宮部の説明は、彼が東京英語学校在学時代以来の新渡戸の終生の友の一人であったこともあって、JHUにおける新渡戸の学習を知るための〈最も信頼に値する資料〉としての役割を果たしてきたのであった。

一方、新渡戸が同大学に留学中に宮部宛に書いた手紙(1885年1月13日付)のなかにも、〈農政〉の研究に言及した、次のような一節がある。

……本年度の授業は、毎週、ローマ制度論2時間、経済理論2時間、行政論1時間、国際法2時間、ドイツ語2時間、これらのほか土地問題(アグラリアン・エコノミー農政)の研究に多くの時間を充てている。どの科目にも増してアグラリアン・エコノミーに力を入れ、多くの時間を割いているというのが今日この頃の実態だ。

引用の最後の部分を鳥居清治訳注『新渡戸稲造の手紙』(北大図書刊行会1976年刊)収録の原文で示すと、次のようになる(なお、同書の原文収録の仕方についてはこの小稿の後段で、改めて問題にする)

……Besides them, much of my time is taken up in researches of Land Question (Agrarian Economy 農政). Indeed I attach greater importance and devote to agrarian economy than to anything else.

(b) JHU 所蔵関係資料

従来の新渡戸研究は、新渡戸留学時代にJHUで発行ないし記録されていた資料をまったく使用せず、また新渡戸がその時期に同大学のスタッフ宛に書いた手紙、報告を全く使用せずに実施されてきたことに特色があった。この点は早急に是正される必要がある。

JHU附属図書館特別文庫、同大学文書館に所蔵されている資料のうち、次の3点は、新渡戸の同大学留学中の実態を知る上に、とくに重要である。

1 『JHU学報』(第34～59号, 1884年11月—1887年8月)

2 『JHU歴史, 政治学ゼミ記録, 1877—1901年』第1巻～2巻のうち、とくに第1巻。

3 新渡戸稲造のハーバート・B・アダムス宛書簡

実態——その1

JHUはボルティモアの実業家ジョンズ・ホプキンスの遺贈700万ドルを同名の病院の建設と折半して1876年に開校された、アメリカで最初の大学院大学であった

(ヒュー・ホーキンス『パイオニア——JHUの歴史, 1874—1899年』コーネル大学出版会, 1960年; 『アメリカ百科辞典』第7巻254頁b)。ホーキンスによれば、1878年から1899年までの間にPh. D. ないしはS. D. をアメリカの主要大学から取得した人の数はJHU 151, ハーヴァード大学43(うちS. D. 12), エール大学101(ただし、エール大学の数字は1861—1889年の取得者数)。

新渡戸がこの大学に入学した1884—85年度のJHUの学生構成は、1886年5月発行の『学報』第46号によれば、大学院課程174, 学士課程69, 聴講生その他47となっているから、当時のJHUは文字通りの大学院大学であった。

この報告の最初の部分で触れたごとく、新渡戸がJHUの大学院に入学したのは1884年10月中旬。同大学文書館に所蔵されている新渡戸自筆の願書によれば、同年10月17日。入学者の登録は、『学報』によると例年9月25日となっているから、彼の入学は他の学生より20日ほど遅れていたことになるが、それを可能にしたのは、ほかならぬ先輩佐藤昌介の歴史・政治学の先任教师H・B・アダムスに対する働きかけであった。

新渡戸の専攻登録は『学報』第34, 44, 52号によれば、大学院入学時の1884—85年度は歴史, 2—3年目は歴史・政治学となっている。

(1) 履修科目

『学報』記載の年度別学科履修表から佐藤昌介と新渡戸稲造のJHU留学時代の履修科目の詳細については、既刊の小冊子『農業経済学の形成過程』において説明したとおりである。

(2) 『歴・政ゼミ記録』

JHUの文書館には、ハーバート・B・アダムスが大学開校の翌年(1877年)から亡くなるまでの25年間に渡って司会した『歴史・政治学ゼミナール記録』が保管されている。一世紀前の記録であるから、当番に当たった学生が書いた〈手書きの記録〉である。

さて太田稲造報告日の〈記録〉を一読して気付くことは、ゼミの進行が手際よく記録されていること、ゼミには三人の教師——H・B・アダムス、リチャード・イーリ、J・F・ジェームソン——の出席で実施されていたことである。これらの教師のうち、イーリは日本の経済学者・社会運動家と、ジェームソンは日本の米国政治史家(とくに高木八尺)と、後にそれぞれ深い係わりをもつようになる。

さて、上記の〈ゼミ記録〉には、新渡戸は「米日関係史」を5章に分けて書き上げる予定であると説明した、

第1表 JHU歴・政ゼミにおける佐藤昌介と新渡戸稲造の報告日と報告課題

| | |
|-------------|-----------------------|
| 佐藤昌介関係： | |
| 1885年1月16日 | アメリカ合衆国における農地関係法 |
| 1885年1月23日 | メキシコにおける共産社会の諸問題 |
| 1885年12月4日 | アメリカ合衆国における公有地の研究——序論 |
| 1886年1月15日 | アメリカ合衆国における公有地の組織 |
| 新渡戸稲造関係： | |
| 1886年11月19日 | 米日外交関係 |
| 1887年1月28日 | ペリーの日本遠征 |
| 1888年1月26日 | アメリカにおける日本人について |

- 備考 1. JHU学報Nos. 38, 46, 47, 55, 57, 65による。
2. 1888年1月26日の新渡戸の報告は家永豊吉によって代読された。

と記録されている。彼がゼミ当日提示した章別構成は、報告日の10日前にウィリアム・グリフィス宛の手紙（東京女子大学新渡戸研究会編『新渡戸稲造研究』1969年、451—2頁）に書いたものと全く同じであり、それがそのままの形で、JHU歴史・政治学研究双書臨時増刊編第3号として3年半後に出版される『米日関係史—歴史的素描』（Inazo Nitobe：“The Intercourse between the United States and Japan—An Historical Sketch” Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science. Extra Vol. 3. 1891.）の構成ともなって引き継がれることになる。とすると、彼の〈日米関係史の研究〉は、ゼミの報告段階で、かなり具体的なものに固まっていたと考えることができる。

しかし新渡戸はJHUに大学院3年終了の直前まで在学していたにもかかわらず、論文を完成しないまま、ドイツ留学に出発した。

ニューヨークからヨーロッパ行きの船に乗船したのは、1887年5月28日であった（松隈俊子『新渡戸稲造』1969年、157頁）と伝えられているから、彼の渡欧は6月中旬に催されたその年のJHU学位授与式の僅か10数日前のことであった。したがって、新渡戸は、この大学から何らの学位も取得せずにドイツに向ったことになる。

(3) 生活——H・B・アダムス宛書簡を通して見た

1926年発行の『JHU在籍者名簿、1876—1926年』（W. N. Brown, ed.：“Johns Hopkins University Half-Century Dictionary, 1876—1926.”）は、新渡戸がこの大学から取得した学位をA. B., extra ordium, 1890と記載している、「文学士、1890年、但し例外規定」と読むことができるであろう。

新渡戸はハレ大学にPh. D. 論文『日本農地制度論』を提出し、学位認定試験にも合格した直後に、「近くア

メリカ経由、日本に帰国するが、それまでにJHUからA. B. が交付されるよう学長と教授会に交渉して欲しい」旨の手紙（1890年5月15日付）をアダムス宛に書き、その理由を次のように説明している。

……先生は、Ph. D. を取得した現在、私がA. B. の交付をお願いするのは不必要なこととお考えになるかも知れません。しかし、この件について私がお願いするのは、次のような理由——すなわち、私はJHUに3年間在学したのに何らの学位を取得しなかった唯一の日本人学生であったということがあります。先生が御承知のように、私は多くの逆境下で学習しましたので、他の連中同様に勉学に励むことができずしてました。しかし、私は先生に対して、資力と健康の許す限り、最善の努力をしたとお誓い申し上げます。そうした努力をしたにもかかわらず、世の人は私を、アメリカに3年も滞在していたのに何もしなかったと考えるに違いありません。私はそのように考えられることを嫌悪します。とくに私を3年間もアメリカに滞在させてくれた私の身内の人たちに、そのように考えられたくないからであります。……これらの点を御了承の上、御配慮を賜りたく……

以上の手紙はハレで書かれたものであるが、新渡戸は渡独以前にも、アダムス宛に彼の経済的・精神的悩みを訴える手紙をしばしば書いていた。

JHU附属図書館所蔵の〈アダムス文書〉のなかには、新渡戸が病氣静養中に、フィラデルフィア郊外からアダムス宛に書いた4通の手紙（発信日は4月23日、5月21日、6月22日、7月29日。いずれも1886年）が所蔵されている。

これらのうち、第1信では「病氣静養のためフィラデ

ルフィア郊外イングルサイドという処に間借りしているが、恐らく2週間位で回復、登校できると思っていること」、6月22日付の第3信では「先生から依頼されたアメリカ歴史学会誌のインデックス作成の仕事 nearing 終了する。熱心に勉強をしているということではできないが、それでも1日に2～3時間は歴史・経済学関係の本を読んでいる。とくに先生が研究するように勧めた課題に関心が向い、学ぶことの多いことを知って喜んでい。郷里からも、ペリー来日に関する多くの資料を入手。……明日、フィラデルフィアに佐藤博士(!)が私を訪ねてくることになっているので、お目にかかる予定……」と書かれていた。

また、7月29日付の手紙には、静養中の苦境が、大要、次のように説明されている。

先生から送られてきた(アメリカ歴史学会誌)のインデックスの校正刷を入手。訂正の上、返送した。札幌時代の学友二人が国費留学生として近く渡米、ボルティモアで会いたいと知らせてきた。一人はJHUに、もう一人はハーヴァードへ入学して研究する由。私は、目下手がけているアメリカ研究(American Studies)を急いで仕上げたいというよりは、経済的に許せば、さらに数年滞在上、完成したいと思っている。しかし健康を害し、赤貧洗うが如き今の私にとっては、それを希望しても、到底不可能なことだ。こうした苦境を考える度にヴィルヘルム・マイターにでてくるロタリオの次の言葉 Here or nowhere is America! を思い出し、心が痛む。

……近くボルティモアに帰るが、従前のように新聞切り抜きの仕事ができるよう御配慮を頂きたい……アダムス宛のこれらの手紙を読むと、新渡戸が次のような状況にあったことが分る。

(1)大学院2年目の後期(1～6月)の大部分を、休学同様の形で、静養生活で過していたこと。(2)彼の論文の課題決定は、この時期に漸く決ったこと。(3)この時期の彼は、経済的にも健康的にも、苦境のどん底にあったこと、などである。

JHU留学時代の「赤貧洗うが如き苦境」について、新渡戸は米・独留学後、札幌農学校教授としての多忙な日程やメアリ夫人の動静などを伝えたジョセフ・エルキントン宛の手紙(1891年4月23日付)のなかで、次のように回想している(東京女子大編『新渡戸稲造研究』456頁)

……多分メアリから田村という少年がわが家に住むようになった事情についてお知らせしたと思います。

私は長い間友もなく、時には1セントの金もなく、アメリカをさまよひ歩いてきた時期の自分自身のことを思い出して、放浪中の全く見知らぬこの少年を引き取りました。……

また、佐藤昌介は「旧友新渡戸博士を憶う」(前田、高木編『新渡戸博士追憶集』収録)という回想記において当時の新渡戸の生活を次のように言及しているが、佐藤の説明は、上記のアダムスやエルキントン宛の手紙との関連で正しく位置づけることができる。

……余は明治19年(1886年)大学院の課程を卒業、……新渡戸君……等と別れて帰朝した。余は帰朝後急に何事も措いて着手せるは、新渡戸君の学資の問題であった。それは幾ら節約してもクリスマス頃まで続かない。

新渡戸のJHU留学時代の生活と学習をこのように追究した後で、話題をこの報告の最初の部分で紹介した『札幌農学校史料(2)』収録の「……太田稲造助教採用及びドイツ留学の儀上請」に戻してもう一度読み返してみると、上請文作成の最大の狙いは、「学力優等才能抜群の新渡戸の苦境を、官費留学生としてドイツに派遣して救出する。とするならば、外交史専攻ということでは、その筋の同意を得ることは難しいから、JHUでの彼の研究を農業経済……農業統計等とする」という、起案者佐藤昌介の政府当局者に対する一種の〈賭け〉にあった、と考えることができるであろう。

JHU留学時代の新渡戸の学習と関連して引用されるのは、われわれが国内資料の(3)として挙げた、彼の宮部金吾宛の手紙(1885年11月13日付)である。彼は宮部宛のこの手紙のなかで「ランド・クエスチョン(アグラリアン・エコノミー)」の学習にどの科目よりも多くの時間を充てている」と書いていたことは、先に説明した通りである。

それでは、一体、何が背景となって、新渡戸はこの時期の宮部宛の手紙に、こうしたことを書いたのであろうか。

この問題を、当時のジョンズ・ホプキンス大学における歴史・政治学ゼミナールの進行状況と関連させながら考察すると、おおよそ次のように追究することができるであろう。

1877年にアダムス司会の下で開始されたJHUの歴史・政ゼミは、1881年にはイーリが、翌82年にはジェームソンが加わり、「アメリカで最初に創設された本当のゼミナールであり、歴史、社会科学の分野で驚くべき役割を演じている」(ヘンリー・B・ブラッグドン『ウッドロ

第2表 1885年11月から1886年2月にかけて実施されたJHU歴・政ゼミの報告課題

| |
|--|
| 1885年1月実施ゼミの報告課題 (司会：H. B. アダムス博士) |
| 1) D. R デューイ：ボルティモア市の行政サービスについて |
| 2) ウィリアム・アレン：F. D. マウリス『回想記』における「メイリーランド州関係声明書」の訂正について |
| 3) J. F. ジェームソン：ヴァージニア会社の社則制定史について |
| 1885年12月実施ゼミの報告課題 (司会：H. B. アダムス博士) |
| 1) 佐藤昌介：アメリカ合衆国における公有地の研究——序論 |
| 2) L. ウィリアムズ：英国ヨークシア州における農業上の諸制度について |
| 3) L. カッツェンスタイン：ビスマルクの経済、社会政策 |
| 4) H. B. アダムス：ローマ教皇の回勅文書について |
| 5) W. C. ランドゴン：イタリアにおける宗教と政治 |
| 1886年1月実施ゼミの報告課題 (司会：H. B. アダムス博士) |
| 1) R. D. マッセイ：大統領府について |
| 2) 佐藤昌介：アメリカ合衆国における公有地の組織。 |
| 3) J. M. ヴィンセント：ブルンチュリーの自筆草稿について |
| 4) A. N. プリス：道路及び運河に対する土地交付の研究——序論 |
| 5) ハーバート・スミス：新しく発見されたクレタ島法典が教示する制度上の諸問題 |
| 1886年2月実施ゼミの報告課題 (司会：H. B. アダムス博士) |
| 1) J. N. ヴィンセント：ストラスブルグ市最古の市民法典について |
| 2) A. B. アダムス：コロンビア大学史 (1774~1865年) の研究 |
| 3) A. N. プリス：アメリカ合衆国憲法の起源について |

備考：JHU学報Nos. 45, 46 and 47より作成。

ー・ウィルソン——学者時代』1967年刊、430頁、注13)といわれるほどの成果をあげていた。ウィルソンがジョンズ・ホプキンスの大学院課程に入学したのは、佐藤昌介の入学と同じ1883年の9月であったから、彼ら二人よりさらに1年遅く入学した新渡戸が大学院2年目の前期を終ろうとしていた頃になると、歴・政ゼミの名声は一段と高まり、新渡戸の学究心を刺激するような質の高い研究発表が相次いで報告されていた。

新渡戸は前掲1885年11月13日付の宮部金吾宛の手紙のなかで、この時期の歴・政ゼミの模様を次のように伝えている。

……ゼミナール (大学院コース) に出席してあれやこれやの報告 (the lectures) に深く感銘する時には、「札幌にもこうした学校を作れないものだろうか」と自分の耳にささやくことがあります……

『学報』第45, 46, 47号記載の1885年11月から翌1886年2月にかけての歴・政ゼミで報告されたテーマを書き写して示すと、第2表のようになる。

この表によれば、上記の四ヶ月間に報告された16の論題のうち、土地問題ないし農業制度に直接関係すると考

えられるテーマは佐藤昌介、ウィリアムズ、プリスなどの四つにすぎなかったが、それらのうち、佐藤の「アメリカ合衆国における公有地の研究」と「運河・道路建設に対する公有地の払下げ」に関するA・N・プリスの研究の二つはかねてからアダムスによって高く評価されていた。(『JHU歴・政ゼミ記録』第1巻、184—186頁参照)

当時におけるJHUの学問的雰囲気がこのようであったとするならば、前掲1885年11月13日付の宮部宛の手紙に書かれている新渡戸の〈土地問題研究〉への関心は、この時期を境として彼の研究が〈日米関係史〉から〈土地問題〉へと転換していくといった種類の出来事を示すのではなく、アダムスの指示によって「日米関係史の研究に従事せざるをえなかった」という環境下での、新渡戸の尽きることのない「農政・土地問題研究に対する郷愁」を示唆するものであろう。

なお、わが国の農業経済学者のなかには、いまなお、「佐藤昌介と新渡戸はJHU留学時代にリチャード・イーリから農業経済学を学んだ」と考えている人が多い。しかしイーリが土地経済学の研究を手掛けたのは彼がJHUからウイスコンシン大学に移ってから、とくに1890

年代の後半からであった。佐藤と新渡戸がJHUに留学していた1885年前後のイーリの主要関心事は労働問題、地方税制、キリスト教社会主義などであり、JHUにおける彼の講義もおおむねこれらの方向に沿って実施されていた。

さて、新渡戸が歴政ゼミで報告した回数は、前掲第1表で示したごとく3回、うち1回は代読であった。JHUの歴史・政治課程で当時P. H. D. を取得した人の回数は、少くとも3回、大部分の人は佐藤昌介の場合に見られるように4回であった。大学院2年目の後期(1885年1月-6月)の大半を病氣静養に充てなければならなかったことがこうした事態を生んだのであるが、前述の1886年11月19日ゼミ報告の段階では、彼はJHUの留学(私費)期間を延長して『日米関係史』を完成することを考えていたようである。これに関連して、彼はボン発1887年8月2日付グリフィス宛の手紙(前掲『新渡戸稲造』頁452)のなかで、次のように書いている。

……私は専攻論文の最後の章(第5章)「アメリカにおける日本人」を書いている……だが予期していなかった北海道庁の任命で当地にきた。この論文を書くことは、私には他の仕事や研究よりも励ましになっていたが、中断を余儀なくされた……

新渡戸が『日米関係史』を渡独後も書き続け、出来れば、ボン大学の新学期が始まるその年の9月下旬までに完成する計画でいたことは、アダムス宛に送った1877年8月9日付、同年11月22日付の手紙にも書かれている。例えば、8月9日付の手紙には「……この手紙と一緒に論文の第3章を送る。少し長すぎるとお考えになるかも知れませんが……」と。また11月22日付の手紙には次のように書かれている。

……私は数週間前に、最終章を書き終りました。……第3章で取り上げた条約改正について先生に申し上げたいのは、条約の内容が私の全く望まない形で締結されているということです。東京で行われていた条約改正のための長期間の会議は再び失敗に終わりましたが、その結果を知って3,800万の日本人の血は1872年以来の激しい怒りで、沸きに沸いています。そうしたことに思いを馳せ、私はこの節を全面的に書き変えるべきだと考えました。アダムス先生、先生は私の論調を過激だと非難されますか……

したがって、渡独直後に書かれた手紙は、次の2つのことを示す。すなわち、

(1)ボン大学に入学するまでの間に論文を完成すべく、非常な努力をしていたこと。

(2)しかしそうは希望したものの、当時の通商条約に対する不満から、最終段階にきて、完成をひと先ず断念したこと。

実態——その2

本節「実態——その2」では、この報告で取り上げてきた「アメリカ留学時代の新渡戸」に関連する問題のうち、まだ解明されていない幾つかの問題にとくに焦点を当てて、追究してみることにする。

新渡戸のアメリカ留学中の生活を知るには、彼のアダムス宛の手紙と並んで、内村鑑三が渡米(1884年11月下旬)後に新渡戸や札幌農学校時代の級友たちに送った手紙を検討することも重要である。この時期に内村がこれらの人びとに書いた手紙には内村の感覚で捕えた新渡戸のJHU留学生活前半の精神状態が現われており、<新渡戸追究>の大きな手掛かりを提供してくれるからである。

新渡戸のJHU時代の生活は、ほぼ同じ時期に相前後してこの大学に学んだ他の日本人留学生との比較においても検討されなければならないであろう。JHUの創設——発展期(1876-1890年)における日本人留学生の歴史には、まことにけん爛たるものがあつたからである。

JHUの大学院に最初に留学した日本人は、旧津山藩出身の箕作佳吉(1857-1909年、動物学)と久原躬弦(1855-1919年、化学)とであった。どちらも在学中に一度は大学院特別研究生(フェロー)に選ばれ、箕作は1879年に、久原は1883年にそれぞれP. H. D. を取得し、新渡戸稲造が渡米する頃には二人は東京大学の教壇に立っていた。

久原がJHU留学時代に津山在住の両親宛に送った手紙は、現在、津山洋学資料館によって編集され『久原躬弦書簡集』(1928年)として刊行されているので、久原の目に当時のJHUが、他大学との比較において、どのように映っていたかを知るのに役立つ。すなわち、次のような箇所である。

……過日友人ノ案内ニテコロンビヤ大学校ヲ一見仕候ニ、日本ノ東京大学ト異ナル事豪モ是ナシ……。誠ニ日本国ノ為祝シ且賀スベキ事ニ御座候(1879年9月27日付)

こうしたコロンビヤ大学に対して、

……当ジョンズホプキンス大学校ハ米国中ニ冠タル大学校ナレバ万事整ヒ、教師ハ委ク米国中有名ノ大学者ニシテ、其生徒タルヤ……或ハオロシヤノ大学校ノ卒業生……或ハ独逸国ノ卒業生……或ハ英国其

ノ他ノ卒業生アリ、日々学者社会ニ接シ毎々學術上ニ付テ互ニ談ジ、實ニ日本ニ在リテハ中々六ヶ敷事ニテ實ニ愉快ナル事ニ御座候（1879年11月5日付）また、エール大学に対しても、

……此処（ニューヘヴン）ハコネチカット州ノ旧都府ニシテ……有名ナエール大学校アリ。此ノ校ハ創立爾来150年位ニシテ、学者ハ随分多数アリ。然シジョンズホプキンス校ハ只グ数年ノ星霜ヲ経ルノミト雖モ遙ニエールノ右ニ出ズ。其高上ナル事ハ中々エールノ及ブ処ニ非ラズ……（1881年7月10日付）

佐藤昌介がJHUに入学したのも、大学の名声と奨学生制度に大きな魅力を感じたからであった。彼がこの大学に新渡戸より1年早い、1883年秋に入学したことについては、すでに触れた。

佐藤はJHUに入学した直後、日本政府の官費留学生となり、新渡戸が入学した翌1884年には、無給の身分であったが、大学院の名誉研究生（フェロー・オブ・コータシー）に選ばれた。彼はまたすぐれた学力に加えて青年歌舞伎俳優を思わせるような好男子であったから、学生間で「モンゴールの昌介王子」（the great Shosuke Khan）のニックネームで呼ばれるほどの大きな存在であった。

新渡戸が大学院2年目を迎えると、同志社出身の元良勇次郎（1858—1912年、帰国後は東大教授、心理学）がボストン大学経由、JHU大学院に入学してきた。元良は同志社卒業後、一時、津田仙の学農社農学校の教師をしていたことがあり、渡米前から新渡戸とは既知の間柄であった。1885年11月と12月に発行された『JHU学報』第44号、同45号収録の住所録には、佐藤、新渡戸、元良のボルティモア市内の宿泊先が「マッカーロー通り4番」と記載されているから、彼ら三人はこの年の秋から冬にかけて、同じ下宿で生活していたことになる。

元良は大学院の2年目——新渡戸は3年目——のときに、年給500ドルのフェローに選ばれた。

さらに元良がフェローに選ばれた1886年9月には、札幌農学校から官費留学生として宮部金吾と渡瀬庄三郎（帰国後は東大教授、動物学）の二人が渡米してきた。宮部はハーヴァード大学で、渡瀬はJHUで、それぞれ大学院生活を送るための渡米であった。

以上は、新渡戸と相前後してJHUに留学していた日本人学生の実態の一部を紹介したものにすぎない。重要なのは、それらの傑出した日本人学生に決して劣らぬ、むしろそれを上回るほどのすぐれた才能に恵まれながら、窮迫した経済状態と健康上の理由で、意のごとく学習で

きなかったJHU大学院学生時代の新渡戸の心境であろう。

新渡戸はドイツ留学が漸く終りに近づき、学位論文を完成、ハレ大学から博士号と修士号の同時取得が確実になった段階で、アダムス宛に「JHUからも学士号が欲しい。学長と教授会に交渉して何とかして欲しい。理由は、JHUに3年間も在学して本国の肉親に多額の学費を使わせたのに、何らの学位も取得しなかった唯一人の日本人だったということでは、面目が立たないからだ……」（ハレ発1890年5月15日付）という内容の手紙を書いていることについては、すでに触れた。彼はまた同じ手紙のなかで、これもすでに引用したごとく、「当時、私は資力と健康の許さざり最善の努力をしたのであるが、いろいろの逆境の下で生活していたので、他の連中と同じように勉強に励むことができなかつた」とアダムスに告げている。

アダムス宛の手紙に書かれているこうした内容を、豊かではなかったにしても、より恵まれた状況下にあった上記の日本人学生の生活との比較において読み返してみると、そこには意のごとく学習できなかったJHU大学院時代の新渡戸の〈無念の思い〉が、回想の形をとって語られていると、考えることができるであろう。

佐藤昌介の奔走によって実現したドイツ留学は、したがって、一方においては当時の新渡戸の経済的苦境を打開し、かつかねてからの希望でもあった農政学の研究を可能にするものであったが、他方においては取りまとめの最終段階までこぎ着けていたPh. D. 論文『日米関係史』を中断、JHUからは何らの学位を取得せずにアメリカを離れるという、彼自身に対する無念と喜びの思いが複雑に交錯するものであった。

さて、JHU図書館「アダムス関係文書」に所蔵されている新渡戸の手紙を、ドイツ留学時代のものとアメリカ留学時代にフィラデルフィア郊外から送られたものとの二つに分けて比較すると、それらが全く違った精神的状況で書かれていたことが分る。というのは、フィラデルフィア郊外から送られた手紙は当時の彼の逆境がそのまま手紙の文体に反映し、暗いトーンで書かれているのに対して、ボン、ハレ、ベルリンなどドイツの留学先からアダムスに送られてきた手紙には、彼の『宮部金吾宛の手紙』に現れているのと同じ、「新渡戸先生特有の何ともいいようのないあのおおらかさ」（松隈俊子）が満ち溢れているからである。

ボン発1887年9月22日付の手紙は新渡戸の文体が次第にこうしたスタイルに変っていくことを示すものである

が、この手紙には入学したばかりのボン大学で聴講中の講義・ゼミに触れた、次のような一節がある。

経済学概論（ナッセ）、プロシヤ公法史、経済学ゼミ（ゼーリング）、経営学（デンケルベルグ）……農業法（シュマッヘル）等の講義・演習に幾度か出席。……ついで折に、イーリ先生にマックス・ゼーリング教授が『北アメリカの農業競争』という新刊書を出したことをお伝え下さい……

また、翌1888年1月6日付の手紙にも、ゼーリングに触れた次のような箇所がある。

……目下のところ、ゼミでの報告を用意するため全く多忙……ゼミはナッセではなく、ゼーリングが司会しています。ドイツ学派特有の徹底した方法で書かれた彼のカナダと米國農業を取り扱った750頁の大著『北アメリカの農業競争』については、前回の手紙で、ついで折にイーリ先生にお伝え頂きたいとお願いした通り……

カウッキーの『農業問題』（1899年）とローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』（1922年）の邦訳書に目を通したことのある人は、ゼーリング『北アメリカの農業競争』がカウッキーやローザによって、彼らが大農優越論を展開する際の、基礎的な文献の一つとしてひん繁に引用されていることを思い出すであろう。

ところでドイツ留学時代に新渡戸がアダムス宛に書いた手紙には、ゼーリングの名前が「最も新進気鋭の学者」として数回にわたって紹介されている。新渡戸がボン大学でマックス・ゼーリングの講義・演習に出席したのは渡独間もない1887年の秋であったから、1857年1月生れのゼーリングはちょうど30歳、新渡戸がアダムス宛に書いているように、文字通りの新進気鋭の学者であった。しかしゼーリングその他のドイツの学者と新渡戸との関係をここでは新渡戸の札幌農学校の高弟の一人、高岡熊雄に従って、新渡戸の学位論文『日本農地制度論——分配ならびに農業的利用』（1890年）が「ボン大学のゼーリングに勧められ、ベルリン大学で研究、さらにハレ大学のコンラッド教授のところで完成された」（高岡「新渡戸先生の追憶」、前掲『新渡戸博士追憶集』54—55頁）と指摘するだけにとどめておく。

さて、新渡戸の農政学研究は渡独後にこうした形で本格化されていくのであるが、それにつけても〈農政学者新渡戸〉の形成過程を追跡するとき、繰り返し問題になるのは、この報告の最初の部分に引用した1885年11月13日付の手紙の一節「……これらのほかに土地問題（アグラリアン・エコノミー農政）」と書いてあることについて

である。

この箇所が鳥居本収録の原文には、この研究報告の84頁のようになっていることについてはすでに触れた。鳥居本収録の手紙原文はもともと矢内原忠雄編『新渡戸博士文集』（1936年11月刊）に収録されていたものをそのまま再収録したものであるが、矢内原本の〈原文〉となった宮部金吾編『新渡戸博士より宮部博士に宛てたる書簡集』（タイプ版）を見ると、この稿本22頁上段にはこの部分が次のようにタイプ・加筆されている。

……In researches of Land Question (Agrarian Economy ^{農政})

したがってアグラリアン・エコノミーに〈農政〉という訳語を付け加えたのが、果して新渡戸自身であったのか、それともタイピストに手紙の原文をタイプさせた宮部であったかは明確でない。この点は原文と対照の上、早急に明らかにする必要がある。

最後にこの論稿を終るに当たって、「米独留学時代の新渡戸稲造」研究前進のために、次の二つのことを付け加えたい。

その一つは、新渡戸が東京大学選科へ入学する際、外山正一の質問に対して「農政学をやりたいが、まだそういう学問はないから取りあえず経済、統計、政治学を学び、ついでに英文学も習いたい。英文学をやるのは、太平洋の橋になりたいからだ」と答えた件についてである。『帰雁の芦』（1907年刊）の冒頭にでてくるこの箇所は多くの『新渡戸稲造伝』の著者たちによって何百回となく引用され、新渡戸が22歳の夏、あたかも〈太平洋の橋〉になるべく具体的構想をもって渡米したように説明されてきた。しかし事実は果してどうであったか、という問題である。

この点の解明に一つの手掛かりを与えるものとして、『日本国民(英文)』（新渡戸全集第13巻9頁）序文における次のような説明、すなわち「それは青年期のファンシー(fancy)であったけれども、(外山氏にお目にかかる以前の——引用者)学生時代にゆっくりと形成されていた私の願望でもあった」という説明が注目されなければならない。というのは、「願望」が「ファンシーの形をとっていた」という新渡戸自身の説明は、渡米の段階では彼はまだ「願望」を実現するための具体的構想をもっていなかったことを意味するからである。彼がもし、「東西両洋の思想を伝達する太平洋の橋」になるための具体的構想をもって渡米していたならば、渡米直後に入学したアレゲニー大学を2週間足らずで退学してJHUに移るようなことにはならなかったであろうから、彼の留学生

活はわれわれがこの小稿で取り上げたものとは全く別の形で展開していたであろう。

もう一つの問題は彼における官房学 (cameralistic science) の位置づけについてである。彼がカメラリストイック・サイエンスないしはカメラール・サイエンスという言葉に強い愛着をもっていたことは、彼の『英文札幌農学校』(1893年刊)を一読すれば明らかである。彼はそのなかで札幌農学校を設立した明治政府の意図をフリードリッヒ・ヴィルヘルム一世によるハレ、フランクフルト両大学における官房学講座の設置になぞらっていた(8頁)。新渡戸は官房学を<カメラ学>と訳しているが、彼がこの用語に親しんだのは、いうまでもなくドイツ留学中のことであった。以来彼は、明治帝の三本木原御訪問(1876年)を契機に農政の研究を志しただけあって、「帝のための学問」である官房学には人一倍愛着をもっていた。晩年の彼の心のうちを奔流となって貫いていた二つの理想——国際志向と官房学志向——は、明治・大正期を通じて見事に開花した。しかし昭和期に入って軍部が権力を握るにつれ、彼は次第に悲劇の人になっていく。したがって晩年の新渡戸の評価は京都とパンフの二つのIPR会議における彼の行動、発言をこの角度から検討することによって再構築されなければならない。

謝 辞

この研究は昭和59年度科学研究補助金、一般研究C「新渡戸稲造における農政学の形成過程に関する研究」の研究成果の一部をまとめたものである。資料を提供していただいたジョンズ・ホプキンス大学図書館、同大学文書館、および鳥居清治氏の御厚意に心からお礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1 "Johns Hopkins University Circulars." Old Series. Nos. 34—59. Nov. 1884—Aug. 1887.
- 2 "Records of the Historical and Political Science Association and of the Seminary of History and Politics." Vol. I.
- 3 Henry W. Bragdon: "Woodrow Wilson—the Academic Years." Harvard Univ. Press. 1960.
- 4 Hugh Hawkins: "Pioneer—a History of the Johns Hopkins University, 1874—1899." Cornell University Press. 1960.
- 5 "Inazo Nitobe's Letters to Herbert B. Adams," in H. B. Adams Papers. JHU M. S. Eisenhower Library.